SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

Development of a subject in the art department dealing with Enshu Yokosuka Kite : A case study at Shimada Junior High School of the Faculty of Education of Shizuoka University

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田丸, 光恵, 髙橋, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027129

実践報告

遠州横須賀凧を生かした美術科の題材開発
—静岡大学教育学部附属島田中学校での事例研究—

田丸 光恵　髙橋 智子
静岡大学教育学部附属島田中学校　静岡大学教育学部美術教育系列

Development of a subject in the art department dealing with Enshu Yokosuka Kite
-A case study at Shimada Junior High School of the Faculty of Education of Shizuoka University-

Mitsue TAMARU Tomoko TAKAHASHI

要旨

近年、美術科の題材開発において、地域の人材や機関等との連携が盛んになっており、様々な実践が報告されている。静岡大学教育学部附属島田中学校の美術科においても、これまで地域の作家や学芸員（美術館等）と連携を行い、積極的に題材開発や授業研究に取り組んできた[1) 2)]。美術科の授業づくりにおいては、担当教員が様々な工夫を行い題材開発に取り組んでいる。その中でも、地域の「ひと・もの・こと」とのつながりを授業に生かしていくことは非常に重要な視点であると考える。本論では、掛川市で受け継がれてきた「遠州横須賀凧」を生かした題材提案やその実践内容、さらに成果と課題について報告をおこなうものである。

キーワード：　美術科　伝統　地域　遠州横須賀凧　題材開発

１．はじめに

平成 29 年に告示された中学校学習指導要領では、美術科において生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての理解を深める学習の充実を図ることが示され、教科目標の改善が図られた。

目標では、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めることが謳われており、自然の造形や美術作品と関わることで自分の中に新たな価値や意味をつくりだすことが求められている[3)]。さらに、我が国や郷土の伝統や文化の魅力を理解し、その違いを認めながらよりよい社会を形成していこうとするための教育の一層の充実も求められている[4)]。学習指導要領の改訂は、教員がこれまでの自身の授業や題材のあり方を振り返り問題意識をもつとともに、新たな題材の可能性を模索していくきっかけとなる。「伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育」[5)]の推進のために、美術科の果たす役割は大きく、その可能性を教員は模索し続けていく必要がある。

美術科では、地域の身近なものや伝統的なものを生かした題材開発や指導の充実が指摘されており、地域の伝統的な工芸や民芸等に使用されている材料や表現技法、それに関わる人材の活用について美術の学習を深めるために重要であることが示されている[6)]。附属島田中学校の美術科においても、これまで地域の作家や学芸員（美術館等）と連携を行い、伝統的な工芸等を取り上げ、積極的に題材開発や授業研究に取り組んできた[1) 2)]。地域の「ひと・もの・こと」とのつながりを授業に生かしていくことは重要な視点であると考える。近年では、日本各地で地域性を生かした題材開発や実践が報告されている（笠原ら、2018）[7)]。

本論では、掛川市で伝承されてきた「遠州横須賀凧」を生かした題材提案（以下、本題材と記す）やその実践内容、さらに成果と課題について報告をおこなうものである。地域の「ひと・もの・こと」を生かした題材開発と実践に取り組み、その可能性を模索する。

２．附属島田中学校美術科の研究概要

（１）教科テーマ

本章より、附属島田中学校（以下、本校と記す）で行った美術科の題材開発について、詳細を報告していく。本実践では中学校１年生を対象とした。

本校の生徒は、指示されたことに対しては真面目に取り組めるが、表現のねらいによっては、苦手意識をもつ生徒もいる。また、思いや主題をもてないと、積極的に表現に取り組めず、作品ができれば良いという作品至上主義的な考えをもつ生徒も少なくない。本来、人間は何かを発想したり、必要なものを生み出したりする欲求をもっている。自らの手でそれを成し遂げた時の喜びは大きい。だからこそ、自分の思いを積極的に表現することが求められている。美術科は表現や鑑賞の幅広い活動を通して、美しいものに感動する心、新しいものを創造する力や多様な社会で主体的に

生きていくために必要な資質能力を育んでいく教科であり、人間形成に欠くことはできない。

本校美術科では、造形的な見方・考え方を働かせながら制作過程において試行錯誤を繰り返し、よりよいものを追究していく中で、創造の喜びを味わうことができる生徒の育成を目指していきたいと考えた。教科テーマは「造形的な見方・考え方を働かせ、創造の喜びを味わう生徒の育成」とした。単に作品をつくることが目的ではなく、表現や鑑賞の学習過程を通して、感性や想像力を働かせて様々なことを感じ取ること、新しい見方や考え方に出会い新たな価値を創造すること、そして、表現したり鑑賞したりする喜びにつなげていくことを大切にしたいという思いを込めた。創造の喜びを味わうことができる生徒像を目指し、サブテーマを「つながりを重視した授業の工夫」とした。

（２）研究の視点

教科テーマに迫るために、具体的な方法として４つの「つながり」を重視している。１つ目は「地域のひと・もの・こととのつながり」である。２つ目は「小学校・中学校での題材のつながり」、３つ目は「中学３年間の学びのつながり」、４つ目は「題材内での学びのつながり」である。中学３年生で美術が学び修めになる生徒もいることから、小学校から中学校の図画工作科や美術科での学びが生涯にわたって生かされるために、「つながり」や過程を重視した題材開発や授業づくりの工夫を検討していく。

４つの「つながり」を意識して、題材及び授業を構想することや精選した学びを検討していくことを通して、生徒につけたい力を計画的・段階的に明確にして取り組んでいった。その過程で、自分の思いや見方・感じ方、創造した作品等に自信をもって語り、認め合える人に育ってほしい。その積み重ねが、生徒の自信や創造の喜びとなり、さらには、生徒が創造の喜びを味わい、達成感や充実感、満足感等を味わうことにつながり、美術科で育成を目指す資質・能力を育成できるのではないかと考えた。

（３）美術科で育成を目指す力

本題材で育成を目指す力を図１に示した。教科テーマを達成するために、図画工作科で培ってきた学びや経験を基礎として、学習指導要領に基づき、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の３つの観点を柱としている。

「知識・技能」では、制作意図に応じた材料や用具の使い方、活用の仕方に関する知識・技能及び材料や用具の特性に応じた制作手順や完成の見通しの立て方に関する力の育成を目指している。

「思考・判断・表現」では、対象を深く見つめ、感じ取る力や想像力、自他の美意識や美的価値観について考える力の育成を目指している。

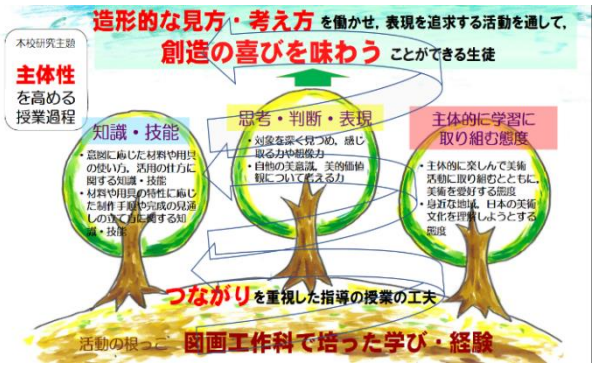

図１　本題材で育成を目指す力

「主体的に学習に取り組む態度」では、主体的に楽しんで生徒自身が美術活動に取り組むとともに美術を愛好する態度や本題材のような身近な地域の文化を理解しようとする態度の育成を目指している。

３年間を通して、３つの力の「つながり」を重視した題材及び授業づくりに取り組み、最終的には「造形的な見方・考え方を働かせ、創造の喜びを味わう生徒の育成」を目指している。

３．地域に伝承されてきた凧を生かした授業実践

（１）「つながり」を重視した題材開発

本題材ではねらいに迫るために、先述した「つながり」を意識した題材開発や授業づくりに取り組んだ。先に述べた４つの「つながり」の内、本題材では「地域のひと・もの・こと」と「中学３年間の学び」の２つの「つながり」の視点を意図的に組み込んだ。先述した４つの視点は、年間を通して、各題材内に組み込んでいる。以下には、本題材で組み込んだ２つの視点について、詳しく説明を加える。

①地域のひと・もの・こととのつながり

本題材では、生徒の居住地の１つでもある掛川市で伝承されてきた「遠州横須賀凧」を取り上げ、さらに掛川に在住している凧づくりの職人との連携を行う。凧は全国各地で作られているが、500 年の歴史をもつ「遠州横須賀凧」（図２）には 20 種類以上もの凧があったといわれている。人々が競い凧揚げを重ねた結果、様々な意匠のものが誕生した[8)]。

横須賀凧の起源は、戦国時代にさかのぼり、敵の陣地の測量や通信手段、凧の尾に密書を託す等、戦さの１つとして重要な役割を果たしていたとされる。江戸時代の城主の加税祝いに家臣達が凧を揚げたのが横須賀凧の起こりで、庶民の生活に凧が入ってきたのは、正徳年代と伝えられている[9)]。モチーフの独特な形

図２　遠州横須賀凧　（左：巴凧、右：べっかこう）

表１　2018 年度入学生の年間指導計

時数	1年（45時間）
1	オリエンテーション・ゆるキャラ
2	鉛筆の使い方
2	ポスターカラーの使い方
4	レタリング＆絵文字に挑戦!
1	日本の美 ～風神雷神図屏風を読み解く～
1	日本の美～海野光弘の版画～
10	見ること・彫ること・刷ることへの挑戦 ～一版多色刷り版画～
1	版画鑑賞会
2	凧の世界
13	伝統をつなぐ（凧） 天まで届け！ぼく・わたしの夢
1	凧鑑賞
7	透視図を用いたデザイン

と色彩の豊かさが特徴の「祝凧」として、地域に伝承されてきた。同じ地域の中でこのような多種類の凧が誕生したのは珍しく、その種類の多さも「遠州横須賀凧」の特色のひとつだといえる。また、凧の紙数の大きさや凧合戦には凧にうなりをつけ、糸を切る道具を用いることも特色としてあげられる。庶民の間でも凧を揚げるようになり、ますます盛んになると、うなりのついた凧や大凧の禁止令が発布された。やがて、凧揚げは４月 20 日過ぎから５月までという期限が定められ、男児の節句祝品として用いられるようになり、今日に継承されている [10]。そのため、男子生徒宅には贈られた祝凧が飾られている家庭も多少なりあることが考えられる。しかし、こうした凧を目にすることはあっても、改めてその意味を考えたり、その歴史や思いに触れたりする機会はあまりない。全体的に、地域の様々な伝統文化に触れる機会が生徒達は少ない。そのため、美術科において、身近な地域で受け継がれてきた独自の美意識や創造の精神を感じ取り、造形的な見方を広げていきたいと考えた。本題材では地域のひと・もの・ことと関わり、凧に込められた思いや願いを考え、いにしえの人々が創意工夫を重ね、思いを引き継いできた凧の魅力を感じ取る活動を取り入れた。

②中学３年間の学びのつながり

本題材の対象は１年生であったため、1 年次の美術科の年間計画について説明を行う。年間で取り組んだ題材は表１の通りである。

１学期５月に俵屋宗達の《風神雷神図屏風》の実物大のレプリカを鑑賞した後、６月以降はこれまで学んだ造形的な見方・考え方を深めていくために、「見ること・彫ること・刷ることへの挑戦」（全 10 時間）において、表現と鑑賞を一体化させた一版多色刷り版画の題材を構想した。

まず、日本美術に対して興味関心をもってもらうために、生徒達にも知名度があったり、親しみがもちやすかったりする《風神雷神図屏風》を取り上げて鑑賞の活動に取り組んだ。鑑賞活動では、作品に何が描かれているのかを考えた後、色や形、構図や使用されている素材、技法等の工夫を探り、その効果を考えた。図画工作科から美術科への学びを深めていく過程で、造形的な要素（例えば、余白の美、切り捨ての美等）に気づかせていった。

次に、一版多色刷り版画の題材では、一学期の《風神雷神図屏風》の鑑賞で学んだ造形的な要素を生かし、島田市博物館の学芸員と連携に取り組んだ。本校に海野光弘の木版画作品（本物：１点）が収蔵・展示されていることから、作品鑑賞と学芸員から話を聞くことを通して、作品の魅力とともに制作する過程、思いの変容、主題を追究することの大切さに気づくことにつながった。「見ること・彫ること・刷ることへの挑戦」では、海野光弘のものを見つめる視点の豊かさにも触れたことから、生徒それぞれの思い、視点を工夫して、写実に迫る表現をしようと取り組んだ。

こうした題材間の学びのつながりを意識した題材開発や授業づくりを行った結果、造形的な見方や考え方

を意識し、表現や鑑賞の活動を追究したいという思いを持って表現や鑑賞に取り組む生徒が増えてきた。

一方で、主題づくりでは、自分の考えを見つめたり、思いを深めたりすることに課題を抱えている生徒が多く、その点が課題として残った。

本題材は「思いを込めて絵を描く」「思いを空へ揚げる」という特徴を併せ持っている。地域で伝承されてきた凧のことを学び、自らの夢や願い、思いを込めて、絵柄の色や形を試行錯誤していくことが可能である。さらに、自らの思いを凧に託し、大空へ夢を揚げることも可能である。２次元の作品が３次元の世界へ広げることで、自身の思いをつくり作品を創造するきっかけになるとともに、創造の喜びや達成感も充実したものになると考えた。

（２）題材名

「天まで届け！～ぼく・わたしの夢～」

（３）対象学年

第１学年（男子 50 名、女子 58 名、計 108 名）

（４）生徒の実態把握（事前アンケート）

本題材の実施前に、凧に関する事前アンケートを実施した。

生徒の凧への興味（図３）は、「凧にとても興味がある」「まあまあ興味がある」と回答した生徒は約 70%であり、おおむね興味を抱いていることが分かった。さらに、90%の生徒が「凧をつくってみたい」と回答しており制作への意欲を示していた。

ただし、「凧は身近ですか」という問いに対して、73%の生徒が「いいえ」と回答しており、実物の凧を見たり揚げたりした経験がない生徒が 40%近くいることが分かった。凧を制作した経験（図４）については、「凧をつくったことがない」と回答した生徒が 65%であった。「ある」と回答した生徒は 40%近くになったが、「絵付けのみ」がその半数を占めており、骨組みを組む等の一連の凧づくりに取り組んだ経験は少ないといえる。また、凧にはいろんな形があることや日本の伝統的なものがあること等は 70%近くの生徒が知っていたが、その意味や歴史についての理解は低い傾向にあった。

本題材前に実施した一版多色刷り版画の題材では、つながりを意識した授業づくりを通して、造形的な要素を取り入れながら表現や鑑賞をし、表現を追究したいという思いを持って取り組む生徒が増えてきた。一方で、主題づくりでは自分の考えを見つめたり、深めたりすることに課題を抱えている生徒が見られた。本題材の凧は、「思いを込める」「思いを揚げる」という特徴を併せ持っている。事前アンケートの結果から生徒達も凧に興味関心を持っているが、身近なものではなく、見たり揚げたりつくったりしてきた経験には個人差があり、さらに凧の意味や思いについては生徒の多くが理解していない結果となった。本題材では、地域の凧に込められた意味や思いについて鑑賞を通して学び、その学びを自己の表現に生かしていく過程を重視する。表現では、自らの夢や願い、思いを込めて、色や形を試行錯誤することで、自身の思いを凧に託し、大空へ夢を揚げることが可能になる。２次元の作品が３次元の世界へ広がり、創造の喜びや達成感も充実したものになると考えた。

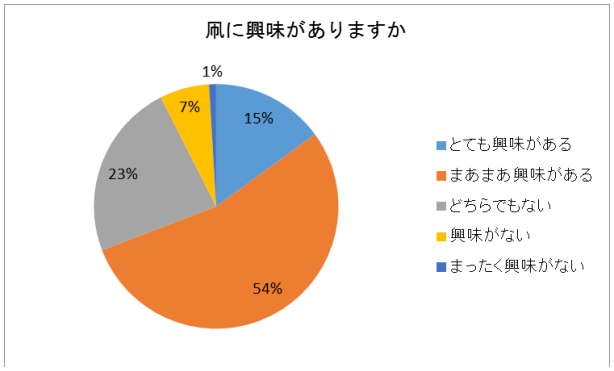

図３　生徒の凧に対する興味

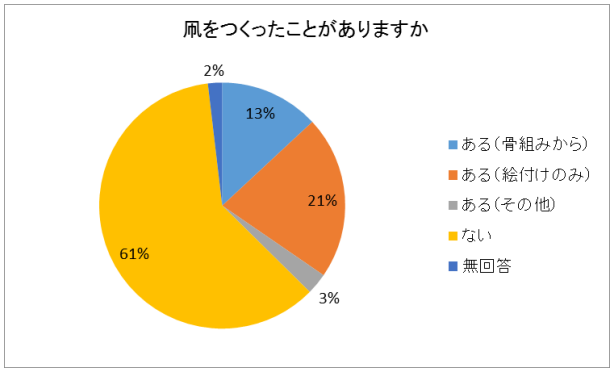

図４　凧の制作経験

（５）題材目標の概要

本題材で生徒につけたい力を美術科で育成を目指す力（図１）と関連づけて示したものが、表２である。本題材において、新学習指導要領にある「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に向かう力、人間性等」をもとにしてある。表２には、本校美術科で生徒に育成する３つの視点と本題材で育成を目指す力を関連づけて示している。

（６）指導計画及び各時の目標

表２をもとに、本題材の指導計画と各時の目標を設定したものが表３である。本題材は、全 13 時間で構成されており、第１学年の 10～12 月にかけて実施したものである。本題材では表現と鑑賞の活動が相互に関連づけられている。効果として、生徒達の表現及び

表２　美術で育成を目指す力と題材目標の関連

美術科で育成を目指す力	題材目標
・形や色彩などの造形要素に関する知識 ・材料や用具の特性に応じた制作手順や完成の見通しの立て方に関する知識・技能	【知識・技能】 ・凧に多く用いられている色や形などを理解し、自分の夢や思いを込めた主題を画面全体との調和を図りながら、工夫をこらして表現できる。 ・制作手順や完成の見通しをもち、絵柄の形や色に思いを込めて表現できる。
・豊かに発想し、構想する力 ・意図に応じて表現方法を創意工夫する力	【思考・判断・表現】 ・自分の夢や思いをもとに強く表したいことを主題として生み出し、そこから繋がるモチーフを構成しながらアイデアを具体化して考える。 ・凧を制作される方の話を聞いたり、凧に込められた願いを考えたりする活動を通して、いにしえの人々が創意工夫を重ねて引き継いできた工芸美術品を感じ取る。
・制作過程の試行錯誤を大切にし、よりよいものを追究しようとする態度 ・身近な地域の美術文化を理解しようとする態度	【主体的に学習に取り組む態度】 ・凧の特性と自分の夢や願いなどから進んで表現の主題を生み出し、意欲的に取り組もうとしている。 ・作者が作品にこめた夢や願いに関心をもち、主体的に感じ取ろうとしている。

表３　指導計画

時	＜授業名＞　　○授業内容	主な検証方法		
		知・技	思判表	主体的
第1・2時	＜世界美術発見！静岡の美！凧の魅力『静岡県の凧を中心に』＞ ○自分たちの住む静岡県の凧を味わい、（凧づくりの職人の話も取り入れながら）凧にはどんな意味があり、どんな願いが込められているのかを考えることで興味をもつ。 ○凧全体や、各モチーフの形や色などの部分に着目して味わい、凧に込められた意味や制作目的、用途などを考える活動を通して、いにしえの人々が相手を思いやり、創意工夫を重ねて引き継がれてきた工芸美術品を感じ取る。 ○凧の絵柄に着目して、単純化・省略・強調、彩色、余白の美などの造形的な要素を味わうことで、大空に揚げても目立つ凧の絵柄の特徴をつかむ。		◎	○
		ﾜｰｸｼｰﾄ 対話 観察		
第3時	＜主題を考えよう＞ ○現在の自分を中心に、がんばっていることや、将来なりたいものやなりたい姿など書いていく活動を通して、自分がどんな主題をもって表現するのかを考える。		◎	○
		作品・ワークシート 対話・観察		
第4・5・6時	＜主題をもとにアイデアスケッチをしよう＞ ○表したい主題や、現在頑張っていることから、言語をもとに、キーアイテムとなる資料を探したり、描いたりする。 ○凧の制作の見通しをもち、自分の表現したい主題、夢や願いから発想を広げ、思いを込めたモチーフの大きさや組み合わせを考えるなどして凧のアイデアスケッチを練っていく。 ○保護者の方に書いていただいた自分に対する願いや思いを受けとめ、アイデアを深めたり、考えたりして追究していく。 ○事前に日本の文様や伝統色なども紹介し、掲示しておくことで、絵柄のアイデアスケッチを深めたり、配色計画を考えたりする。	○	◎	○
		ｱｲﾃﾞｱｽｹｯﾁ 対話 観察 制作ｶｰﾄﾞ		
第7・8時	＜夢や思いがつまった構図を考えて下絵を描こう＞ ○自分の主題、夢や願い、アイデアスケッチをもとに、思いを効果的に表すような構図を考えながら下絵を描く。 ○アイデアスケッチをもとに、凧に下描きをする。	◎	○	
		作品・対話・観察 制作ｶｰﾄﾞ		
第9・10時	＜表現～彩色～＞ ○墨の美しさを味わいながら、凧に絵を描く。 ○墨・和紙・筆などの材料や用具、濃淡、にじみ、かすれなど墨の表現における特性を効果的に用い、画面全体との調和を図りながら、工夫をこらし創造的に表現する。	◎	○	
		作品・対話・観察 制作ｶｰﾄﾞ		
第11・12時	＜表現～凧の運命が決まる「骨組み」をつけよう～＞ ○凧づくりの職人からよく揚がる凧にするためのポイントを聞く。 ○凧の中心を意識しながら、絵柄の裏に竹ひごを接着して形にする。 ○接着が終わったら、自分の夢を表現した凧を揚げる。	◎		○
		作品・対話・観察 制作ｶｰﾄﾞ		
第13時	＜鑑賞会＞ ○全体や部分に着目して、造形的な特徴や絵柄に込められた夢や願い、工夫などを味わい、互いの良さを認め合う場とする。 ○自分の夢や願いを表現した凧を揚げる。		◎	○
		作品・対話・観察 制作ｶｰﾄﾞ		

鑑賞の力が相対的に高まると考えたためである。鑑賞後に表現に取り組み、再度鑑賞を行うという構成とした。

①身近な地域の美術文化を理解しようとする態度（主体的に学習に取り組む態度）の育成

導入の第１・２時においては、「遠州横須賀凧」の鑑賞に取り組み、凧のもつ意味や込められた願いについて個人や小グループ活動を通して考えを深めて行った。漠然と対象作品を見るだけではなく、絵柄や色彩の特徴をとらえながら、造形要素の視点やその効果に気づかせ、生徒の意欲を喚起していった。先に実施した他題材では、学習課題が漠然としていたために生徒の意欲や学びに差が出てしまった。そのため、導入である鑑賞活動では「凧に込められた願い」に気づくために学習課題を明確にし、さらに主題に迫っていけるような発問に重きをおいた。

第３時は、第１・２時で感じ取ったことをもとに生徒１人１人の主題を掘り下げていく時間とした。前時の鑑賞では凧に込められた願いや思いに迫るとともに凧に願いや思いを込める意味を理解し、表現では生徒が自身の凧に願いや思いを込めていく時間となる。生徒が地域の凧の鑑賞を通して、自身の表したい主題をもつことがその後の作品制作の意欲につながると考えた。そのため、実物の凧や教員が制作した参考作品等も積極的に紹介して、その魅力や思いを引き出していった（図５）。実際に、実物の凧の提示は、生徒の凧への関心も高めていった。

図５　授業で実物の凧を提示している様子

②豊かに発想し、構想する力（思考力・判断力・表現力等）と形や色彩等の造形要素に関する知識（知識・技能）の育成

本題材では、前題材の課題を受けて、ワークシートや対話を用いて自分の表したい思いを言語化して、自身の主題を丁寧に深めていくことをこれまで以上に重視した。さらに、凧づくりの職人と連携を行うことで、生徒の表現への思いが深まり、表現の幅が広がるだろうと考えた。主題を明確にした上で、アイデアをじっくりと練り、表現活動へとつなげていった。凧の職人には、２時間続きで実施した授業に参加していただいた（図６）のだが、この時間の参加のみにとどまらず、凧づくりの各工程では職人から事前にアドバイスをもらい、それを折に触れて生徒に紹介し、自分の主題や夢や願いに合うモチーフを選んだり、アイデアを生み出すきっかけとしたりするようにした。前題材においても、博物館の学芸員と連携を行い、海野光弘の思いや、作品の造形的な見方や考え方、工夫等の話を聞いたことで、生徒の表現への思いが深まり活動の幅が広がった。例えば、海野作品の特徴である黒を基調とするような表現や白抜き等は、生徒達が今まで出会ったことのない表現であったことから、その効果に驚き、強いインパクトを与えていた。取り組んだことのない表現方法や、造形的な要素の視点は、新たな発想を生む手がかりにもなった。

図６　職人と生徒の交流の様子

第４～６時では、主題をもとにアイデアスケッチに取り組んだ。アイデアスケッチは繰り返し取り組ませる過程で、描きたいモチーフの大きさや組み合わせ等を検討し、構図や配色を決定していった。表現したいテーマを明確にもった上で試行錯誤や創意工夫した生徒は、仲間の創意工夫（形や線、色彩、モチーフ、技法に込められた思い等）を感じ取ることができるようになり、それが相互に作品のよさにも気づくきっかけとなった。

第７～12 時では、凧の制作に取り組んだ。第７、８時で下絵を描いた後、第９、10 時に染料やポスターカラーで彩色を行った。第 12、13 時で骨組みを和紙にはり、作品を完成させていった。

③制作過程の試行錯誤を大切にし、よりよいものを追究しようとする態度（主体的に学習に取り組む態度）の育成

第６時までに取り組んだ主題を決定しアイデアス

ケッチを行う活動は、その後の表現の追究にも大きく影響を及ぼした。１年生である生徒が、自分を見つめ、将来の夢や願いをもとに主題を見つけ深めていくことには難しさが伴う。しかし、地域に伝承されてきた凧に込められた思いやそれをつくる職人の思いを知り、受け継がれてきた技能等について理解を深めていく過程を通して、自分と向き合い、主題や新たな表現を創造していく姿を期待した。

先にも述べたが、ワークシートの活用や友達との対話等を取り入れることで、具体的に思いを言語化し考えを明確にしていくこともできると考えた（図７）。さらに、制作の見通しをもてるように各時間の活動内容や課題等を書き込む制作カードを作成した。このカードを用いて、子どものつまずきや思考の変容、表現における試行錯誤等がわかるようにした。

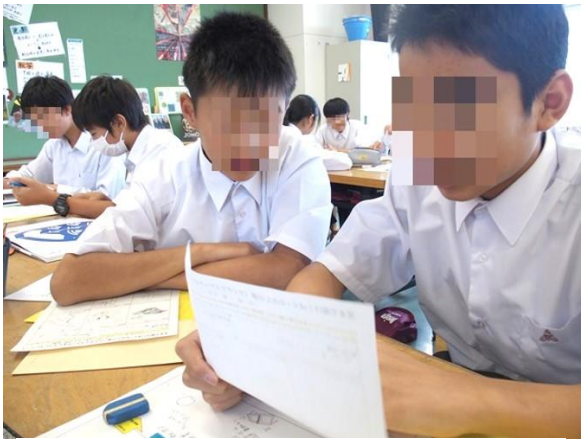

図７　主題を伝え合う活動の様子

４．成果と課題

本実践の成果と課題について考察をおこなう。その方法として、抽出した生徒Ａと生徒Ｂについて分析を行い、その後、全体に実施した事後アンケートについて分析を行う。生徒Ａと生徒Ｂは、入学時から美術に対して苦手意識を持っている生徒である。このような実態をもつ生徒が、年間の各題材を通してどのような力をつけ変容していくのかを追っていくために抽出生徒として設定した。

（１）Ａの変容

生徒Ａ（以下、Ａと記す）は、思いがあってもアイデアを描くことが難しく表現する手が止まってしまうことがよく見られる。Ａについては、美術科で育成すべき資質・能力の内、「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」が、特に重点的に指導支援を要すると考えている。

Ａは、中学校入学当初のアンケートで、美術（図画工作）は「やや好き」で、その理由として「特に図画工作の工作の方が好きで、自分が想像して形にしたものを友だちに評価してもらえるから。」（原文ママ）と回答している。また、日曜大工をした時に図画工作科で学んだ事が生かせるから、美術（図画工作）は「やや大切」と答えた。自信がないためか表現での作品も小さめで積極的に活動に取り組む姿はあまりみられない。

本題材の主題決めの際、悩んでいたが熱心に励んでいる部活動に関連づけ、主題を「今がんばっているサッカーで、コートの中でも外でも他人の役に立てるように」と決定した。しかし、主題を決定したものの、アイデアスケッチでは「人が描けない」としばらく悩んでいたため、教員がスポーツのカット集を渡した。それでも描けず、友達のアイデアを見て回った後、しばらくしてからサッカーボールと数学を組み合わせたアイデアを１つ描いた（図８）。生徒同士や、教員と対話をする中で、定規やコンパスを使って計算しながら描くアイデアも生まれてきた。授業で足がかりがつかめてから、アイデアを深めるように美術ノート[11]（図９）に、サッカーコートを半分ずつ反転させ、右向きの矢印は未来に、左向きの矢印は過去を表すようにアイデアを練ってきた。また、このアイデアには、白黒を効果的に用いた海野作品の鑑賞での学びも生きているように感じた。

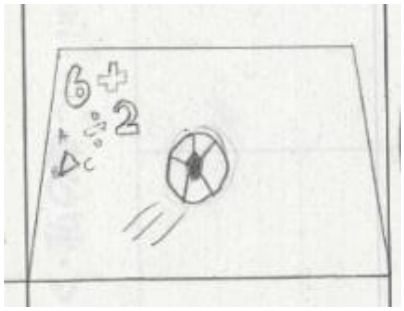

図８　ボールと数字等を組み合わせた当初の案

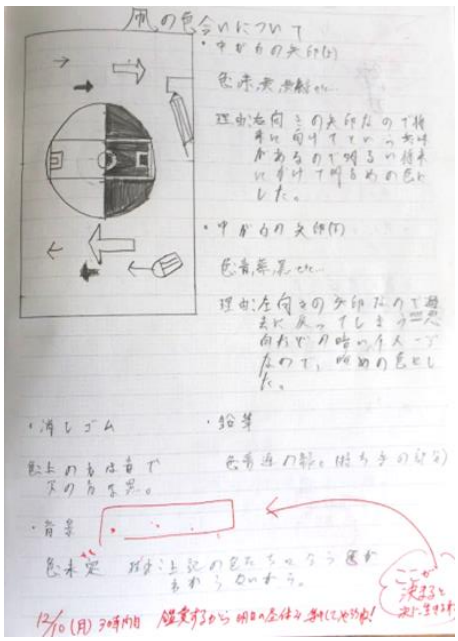

図９　Ａの美術ノート

さらに、表したい思い（主題）が明確になってからは、黙々と制作を進めた。背景の色を白にするか、青にするか迷う姿が見られたが、表現において主題を自ら決定し、このように試行錯誤するＡの姿が見られたことは大きな成長の一歩であった。

Ａの事後アンケートからは、下絵は楽しく、骨組みのはり方や、凧の種類、意味等が理解できたことが分析できた。特に、骨組みをはる活動は、凧の構造が気になると事前アンケートの中で記載していたＡにとって、楽しみにしていた学習内容の１つであった。実際、職人が凧の作り方を説明したり、凧糸を結んだりする様子を真剣な眼差しで見入る様子が観察でき、凧の特徴等に興味関心を高めていった。しかし、自分の主題に対して納得できるような絵を描くことができず、彩色についてはにじむ等して難しかったため全活動の評価は「不満足」であると回答していた。本題材において、Ａは主題を深め（思考・判断・表現）表現への意欲が高まっていることが分かるが、一方で、和紙に彩色する技能（知識・技能）に苦戦したため、思うような作品に仕上がらなかった悔しさが「不満足」の評価に表れている。主題とそれを表現する際の知識や技能は切り離されるものではなく、その指導のバランスが必要であることを改めて感じた。今後、詰めこむだけの知識や技能としてではなく、表現に豊かに生かせる知識や技能の豊かな学び方をさらに追求する必要がある。その点において、職人との連携の可能性を感じている。また、結果として完成作品が納得できないにしろ、表現の過程において、自分が一生懸命に試行錯誤し新たなものやことを創造したことを自身で認められるようになって欲しい。まず、教員が活動過程を価値づけられなければならない。そのための指導支援について、個別にどのように工夫していくかが教員に求められる。

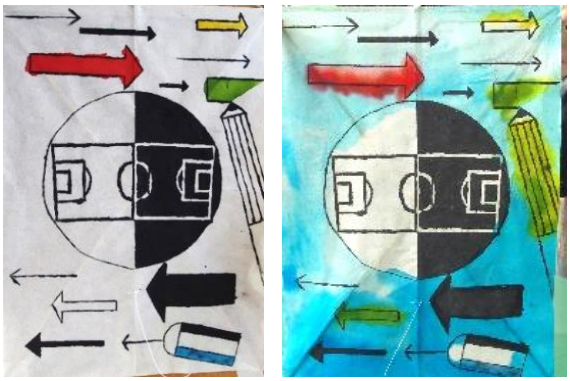

図 10　彩色途中の作品（左）、完成作品（右）

（２）Ｂの変容

生徒Ｂ（以下、Ｂと記す）は、入学当初４月のアンケートで、自分には想像力があまりないし、授業は毎回遅くなってしまうから美術はあまり好きではないと答えている。しかし、「アイデアが浮かんだり、創造したりするのは、１つのスキルで（会社とかプレゼンとかでも役立ちそうだから）、美術はやや大切である」（原文ママ）と回答している。実際、授業に取り組む姿を観察していても、見たままを描くことはできても、自分なりの表現を追求していくことは難しそうである。Ｂについても、Ａと同様に、美術科で育成すべき資質・能力の内、「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」が、特に重点的に指導支援を要すると考えている。

Ｂは、主題を「今の自分が思い描く未来の人々を救う姿」と設定した。主題は決定したものの、主題を色や形で具体化するアイデアスケッチの段階では、どのようなモチーフを選び描いたらいいか悩み、隣の友達のアイデアスケッチを眺めている時間が長くなり、なかなか描き始めることができなかった。机間指導時に、発想するために用いたワークシートの中に「人々を救う医者になりたい」と記載されていることに気がつき、医者を連想させるキーワードを共に考え、引き出していった。Ｂからは、注射器と白衣というキーワードが出てきた。その後、主題を表現するために選んだモチーフをどのように表現すればいいのか悩んでいたため、カット集を参考にすることを提案し、２つのアイデアを描いた（図 11）。

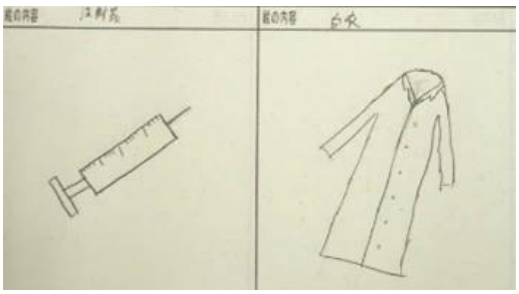

図 11　２つのモチーフのアイデアスケッチ

その後、上記の２つのモチーフ以外に、理科が好きなこともあり実験道具を描き加えるアイデアも生まれた。数多くアイデアスケッチを描いたわけではないが、各モチーフの大きさや組み合わせをじっくり考えていた。また、Ｂは人との対話をきっかけに自身のアイデアを広げて行った。授業中はもちろんのこと、美術ノートを通して教員と対話を重ねた（図 12）。図 12 は、Ｂの美術ノート（一部）である。ここには、授業中の学びを受け、自分の主題に迫るアイデアをまとめたり、練ったり試行錯誤する様子がうかがえる。これを踏まえ、アイデアスケッチに取り組んだ。はじめは、小さくモチーフを描いたため、モチーフの構成が難しい様子だったが、じっくりと考えながら構図を決めて行った。さらに、背景や彩色の視点も加わることで、自身の主題に迫る凧に近づいていった。特に背景の色

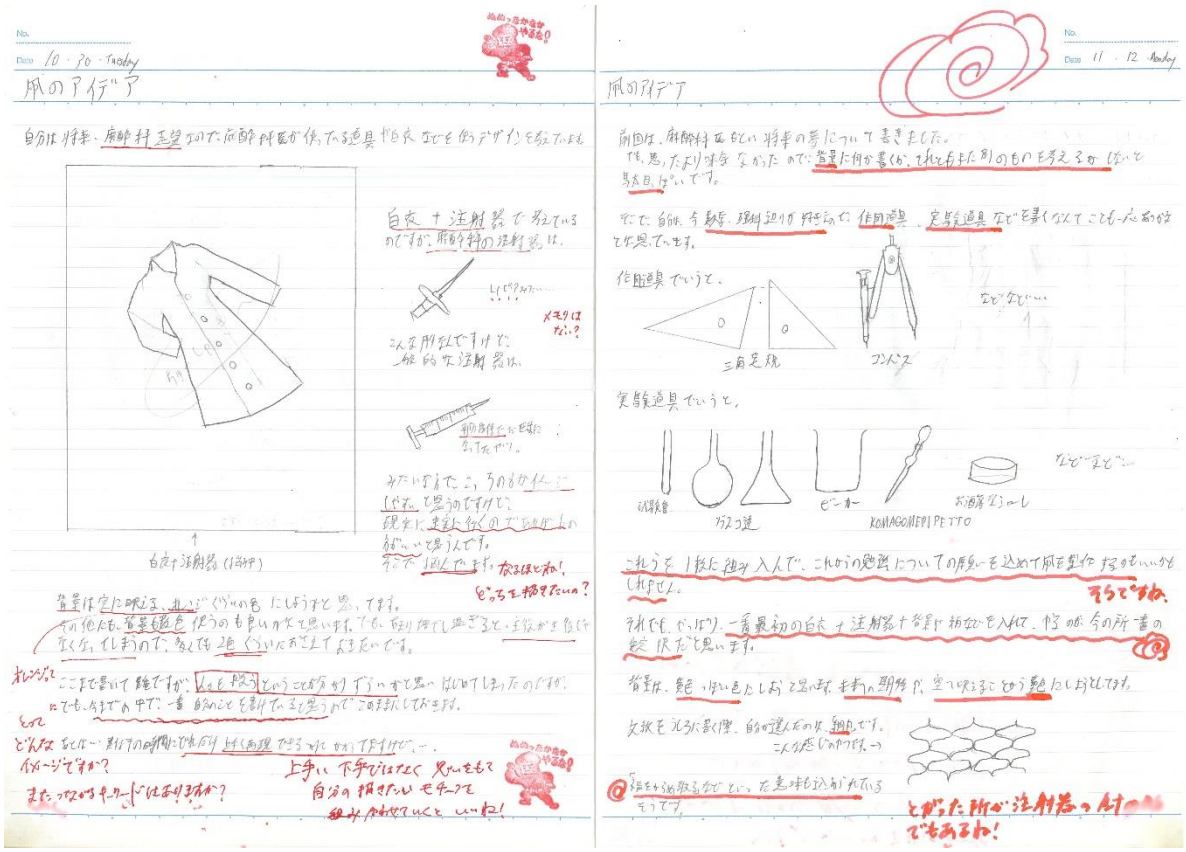

図 12　凧のアイデアが描かれた美術ノート

を決める際には、凧が空に揚がることを想定した上で、空に映える配色を検討することができた。また、Ｂの配色への追究の姿勢は、本題材の導入において、実物の「遠州横須賀凧」を鑑賞していたことが関係していると考えられる。鑑賞では、実物の凧を日の光に透かしながら鑑賞し、凧に使用されている和紙の光の透過性や染料の色の鮮やかさを実際に学んでいた。凧の特性や空に揚げるという必然性が、Ｂの制作に対する主体性を生んでいったといえる。

Ｂは、事後アンケートにおいて、アイデアスケッチが難しかったが、凧が上手く揚がったり、グラデーションが思うように表現できたりしたことから「満足」と回答していた。入学当初は、想像力がないため制作が遅くなり美術はあまり好きではないと考えていたＢだが、最後まで投げ出すことなく諦めずに表現に取り組むことができた。主題を明確にし、表したいことがあるからこそ、追求する姿勢が生まれたといえる。また、Ｂの完成作品（図 13）には前題材の版画での学びが生かされていることも分かる。光と影のコントラスト等を大切にした海野作品にみられる独特の構図や白を生かす配色等が、Ｂ自身の作品の中にも生かされている。

図 13　下書き（左）、完成作品（右）

（３）他生徒の実態

本題材の終了後に事後アンケートを実施した（本校１年生 105 人を対象）。約 70％の生徒が凧の制作について、「大満足・満足」と回答した。理由には、達成感があったから、凧が上手く揚がったから、つくるのが好きだったからが挙げられていた。「やや不満、不満」の理由としては、難しかったけれど絵が思い通りに描けなかったことがあげられており、表現の技能面に関する理由を挙げる生徒が多かった。本題材では、前題材で課題となっていた「主題を明確に持つこと」

に関して、「つながり」を意識し題材開発や授業づくりに取り組んだ。地域の凧を生かした題材提案や職人との連携、友達や教員との対話による交流等である。実際に、事後アンケートの「主題を常に意識して制作できたか」の問いに対して、90%以上の生徒が意識できたと回答していることからも、「つながり」を意識した授業づくりが生徒の主題づくりによい効果をもたらしたといえる。ただ、主題づくりのみならず、知識や技能についても、職人を招いた際に、凧に関する歴史や材料、モチーフに込められた願いや思い、彩色には染料を用いていることを学んでいた。凧は大空に揚げるため、染料で塗られた凧が、太陽の光に当たるとステンドグラスのように輝くことも職人から紹介していただいた。しかし、アンケートの結果を見ると、職人との交流が生徒の学びに効果的に生かされておらず課題が残るかたちとなった。「凧の制作で難しかったことは何ですか」の問いに対して、アイデアスケッチ（39%）よりも彩色（54%）が高い値を示している。表現における知識や技能面での力の育成においても、「つながり」をより生かした授業づくりの工夫が今後求められる。

５．おわりに

本題材では、「つながり」を意識した題材開発や授業づくりに取り組んだ。「地域のひと・もの・こと」と「中学３年間の学び」の２つの「つながり」の視点を意図的に組み込んできた。

「地域のひと・もの・こと」とのつながりでは、地域に伝承させてきた凧を取り上げると共に、凧の職人に来校いただき、実際に交流したり凧を作る過程を見ることができたりする場面を設定した。こうした活動から、職人の技や材へのこだわりや凧及び伝統に対する思いを直接生徒が感じたことで、自身の制作への意欲や主題を生むきっかけになっていった。こうした実践では、単に地域のひと・もの・ことを活用すれば良いということではなく、生徒の実態を把握してつけたい力を明確にした上で、事前に打ち合わせることが必須となる。本題材においても、教員が数回職人と打ち合わせを行い、授業に臨んだ。職人の思いや願いを共有しつつ、授業で目指す姿を共有することが大切である。

「中学３年間の学び」のつながりでは、題材が単発的に実施されるのではなく、学びの系統性を意識してカリキュラムを組んでいった。題材を横断して、地域とのつながりを意識したり、自分の思い（主題）を持たせるために、例えば、授業導入後にペアや小集団で紹介し合ったり、ミニ鑑賞で作品と共に話したりする対話の活動を繰り返し取り入れた。繰り返しおこなうことで、凧制作の実践では、生徒が主題を明確に持ち、表現のねらいや内容を踏まえ、制作に望んでいる姿が多く見られるようになり、さらに、思いを他者に言葉で表現できるようになった。それは、ＡやＢをはじめとする表現が苦手な生徒へも効果的なアプローチであった。生徒のアイデアや発想が広がっていくためには、まず個々の思いを引き出したり、表現したいという意欲を向上させたりする必要がある。生徒の実態は様々であり、個々に違いがあるため、個の思いを引き出し、個に合わせた指導支援が重要になるだろう。本論で得られた成果と課題をもとに、今後も「つながり」を意識した題材開発や授業づくりに努めていきたい。

謝辞
ご協力いただいた「遠州横須賀凧」の職人の皆様に心より御礼申し上げます。

註

１）道越洋美、髙橋智子「大学や地域との連携を通した授業実践の取り組み ： 附属島田中学校美術科における教材研究の工夫」静岡大学教育実践総合センター紀要 21、pp.187-200、2013
２）加茂千景、髙橋智子「作家と連携した鑑賞授業の取り組み ： 静岡大学教育学部附属島田中学校での事例研究」静岡大学教育実践総合センター紀要 24、pp.133-143、2015
３）文部科学省「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　美術編」日本文教出版、2018
４）同上、p.16
５）教育基本法、附則、https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/mext_00003.html、（閲覧日：2019.12.20）
６）文部科学省、前掲書、p.133
７）笠原広一、春野修二「土面子づくりによる郷土玩具の教材化の検討―図画工作科・美術科における実践のための予備的考察―」福岡教育大学紀要、第 65 号、第 6 分冊、2016、p.1-4
８）掛川市役所観光交流課「五百年の歴史　奇想天外な形と色　遠州横須賀凧」パンフレット
９）市川隆、池田政弘、井野盛夫、草ヶ谷一己、日本雪だるまの会編「静岡県の凧」三協印刷株式会社、1986
10）斎藤忠夫「ふるさとの凧」株式会社グラフィック社、pp.50-57、1982
11）本校では、１年生から３年生までの生徒全員に「美術ノート」を作成させている。美術ノートとは、授業外で各自が作成しているものであり、自分の興味関心のある美術に関して調べたり、授業のアイデア等を発展させたりするものとして活用している。